慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	張振犁・程健君編『中原神話選題資料』; 谷野典之「中原神話考」(『中国の歴史と民俗』)
Sub Title	
Author	桐本, 東太(Kirimoto, Tota)
Publisher	三田史学会
Publication year	1997
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.66, No.4 (1997. 7) ,p.185(661)- 192(668)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19970700-0185

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

張振犁・程健君編『中原神話選題資料』（中国民間文芸家協会河南分会、一九八七年）
谷野典之「中原神話考」（『中国の歴史と民俗』、第一書房、一九九一年）

桐本東太

私はここで、張振犁・程健君の編集にかかる『中原神話選題資料』（以下『選題資料』と略称）および谷野典之「中原神話考」の内容について、その紹介と検討をおこなうことにしたい。書評で複数の文章を一度に取りあげるのは、あまり例がないが、書名にも明示されているように『選題資料』は資料集であり、そこに格別の学説が提示されているわけではないので、我が国で本書を利用して書かれた唯一の論文である「中原神話考」をあわせて検討することによって、いわゆる「中原神話」の実態をかいま見ようというのが、本小論のささやかな目的である。

ただそうした作業に着手する前に、従来「中国神話」という存在が、いかなる輪郭を有するものと捉えられてきたか、簡単に言及しておくのは無駄ではあるまい。周知のように中国は長らく「神話なき国」とされ、中国人は神話を持たない、世界史上まれにみる民族と目されてきた。こうした認識を生み出した背後事情はしごく単純であって、それは、神話の最盛期とされる古典古代の時代において、中国がついに体系的な神話伝承を残さなかった点に求められよう。中国の古代社会が、日本の「記紀神話」に匹敵するほど体系的な神話を記録せず、またギリシャ・ローマ神話に比肩しうるような豊富な神話を残すことができなかった理由としては、秦・漢統一帝国が歴史の早い段階で誕生し、従来中国に点在していた諸部族、ないし諸国家間で伝承されていたであろう神話に筆録の機会を与えなかったことや、中国古代国家の思想的なイデオロギーとなった儒教が神話に対して極めて冷淡な態度をとったことなどが挙げられる(1)（ただし儒

教と神話的思考との関係については、従来中国神話学のあいだで正面きって取りあげられることのなかった「緯書」の検討を試みるならば、認識の大幅な軌道修正が迫られることになるかもしれない(2)。こうした中で中国神話学の研究者に与えられた仕事は、古典の中にいちじるしく変形されて書きとどめられた神話の残骸を本来の形に復元する作業、ないしは現在も少数民族の間に豊富に伝承されている神話の探究にほぼ限定されていた。

ところが中国で改革開放政策が進められ、長らく研究の凍結を余儀なくされていた民俗学などの学科が復活し、中国人自身の手によって大陸のフィールド・ワークが再開されてみると、従来の常識を完全にくつがえすような事態が出現したのである。つまりこれまで神話を持たないとされてきた漢民族が、次々と豊富な神話を語りはじめたのであり、そうした伝承を採録した資料集もぽつぽつ出版されるはこびとなってきた。『選題資料』は刊行されてはや十年をけみしているが、いまだにそうした類書の代表格たる位置を失わない重鎮的存在である（というよりもむしろ、本書に収録された分量に匹敵するだけの「活態神話（生きている神話）」が中国各地で採集されていることは自明の事実であるにもかかわらず、海をへだてた私たちにはそれを直接目にする機会の希少なことが、痛恨の念を生じさせてやまない）。

それはさておき、まず本書の誕生したいきさつについて簡単に述べておこう。文化大革命の終結にともない、河南大学では口頭伝承の講座が再開され、それにともなって張振犁氏ひきいる調査団が一九八三年から八五年にかけて河南省のほぼ全域で神話の採集を行なった。その結果、張氏自身の発言を借用するならば、「意外なことに、教育をあまり受けていない、場合によっては文盲の老農民、商人、村の小学校教師、さらには普通の学生や老婦人から、貴重な古代神話の資料を聞き取ることができた」のである。「中原神話考」において谷野氏は、こうした事態を「八十年代における民衆の発見」とまで断言している。事実、『選題資料』には、神話の採集地点や採集日時にくわえ、神話を語った人物の名前・年令・職業にいたるまで、懇切丁寧な記録がそえられている。こうした体裁は我が国で口承文芸を採録するにあたっては、踏まえるべき最低限の手続きとされて久しいが、中国の類書の中ではかつて例を見なかったことといってよい。すでに述べたように、本書が漢族の神話を採集した書物の中で「重鎮的存在」を誇示しうるゆえん

である。

さて『選題資料』の公刊にあたり、既述のごとく日本側から示された唯一のリアクションが「中原神話考」である。谷野氏は本論の中で、『選題資料』に収録された神話のほぼ三分の一を占める、人類起源神話を分析の対象としている。ちなみに神話の主人公は、①伏義・女媧②盤古兄妹③その他の兄妹の三種類に截然と区分され、このような区別の存在することを私は極めて重視しているが、それについては後述する。

さて、それでは「中原神話考」の検討にはいる前に、まずそのティピカルな伝承を紹介しておこう。なお冒頭に付した番号は、読者の理解の一助とするために便宜的な段落分けをしたものである。

①昔、盤古とその妹がいた。二人が学校に通う道のかたわらに石の獅子があったが、ある日その獅子が二人に向かって話しかけてきた。「もうすぐ大変な天災がふりかかってくるから、その日のために毎日マントウを持っておいで。」それからしばらくして大洪水が起こった。兄と妹は獅子の体内にのがれ、そこに蓄えられたマントウを食べて飢えをしのいだ。彼らが獅子の口から外に出た時、盤古と彼の妹をのぞき、人類はすべて死に絶えていた。

②このままでは人類は滅んでしまう。この事態を防ぐため、盤古は妹に結婚を申し込んだが妹は拒絶した。そこで彼は妹に向かって言った。「二つの石磨(うす)をそれぞれ二つの山の頂きから転がそう。もし二つがぴったり重なったら、僕の願いを聴いてくれ。」実際にやってみると果たして石磨は重なったので、二人は結婚することになった。

③しかし二人で子供を作っているだけではとても追いつかない。そこで彼らは盤古山の山頂で泥をこねて、数え切れないほどの泥人形を作り始めた。ところが突然嵐が吹き荒れ、慌てた二人はほうきで人形をかき集めたが、その時いくつかの人形の手や足が折れてしまった。今の世の中に体の不自由な人がいるのはこのためである。

谷野論文の要旨は極めて多岐におよんでいるが、その骨格部分は、ここに示された人類の起源神話が、番号をふった三つのサブ・モチーフのつぎはぎであることを論証し、あわせて各々の箇所に対応する古伝承を提示した点に求められる。

谷野氏によると第一段落は「洪水の予告」とでも命名

されるべき部分であり、それは『述異記』（六朝時代）にみえる次のような伝承と対応しているという。

その昔、歴陽は陸地であったけれども、今は陥没して湖になっている。かつて一人の書生が老婆のもとを通りすぎたが、彼女は書生を手厚くもてなした。そこで書生は老婆に告げた。「ここの県城の門にある石亀の目から血が滴り落ちた時、この地は陥没して湖になるでしょう。」この言葉を真に受けた老婆はしばしば県城の門に通ったが、これを不審に思った門番がその理由を問いただすと、老婆は詳しく事情を説明した。そこで門番は朱で石亀の目を赤く塗りつぶした。これをみた老婆は北山まで走って逃げ、振り返ってみると、果たしてその地は陥没して湖になっていた。

谷野氏は自説を補強するため、『選題資料』に洪水の始まりを「天が崩れ、地が陥没した」と形容するものがあることを紹介し、中原神話の洪水モチーフは『述異記』と同じく、「予告陥没型の洪水神話」に属するものと主張している。

次の第二段落について、谷野氏はこれを「全くといってよいほど特徴が見られない」伝承であるとしているが、それはつとに氏が別の論文において、この部分に類するモチーフと『独異志』（唐代）に筆録された次のような神話との関連を指摘ずみだからであろう。(3)

世界が誕生した時、この世の中には女媧と彼の兄しか存在しなかった。そこで兄は妹とともに崑崙の山頂にのぼり、「もしも天が我々二人の結婚を望んでいるなら、焚き火の煙が天空で二つに重なるだろう」と言った。火を焚いてみると果たしてそのようになったので、二人は結婚した。

『独異志』の記載は二人の結婚より先のことに言及しないが、華南の少数民族のあいだで広範に伝承されている人類の起源伝承と比較してみるならば、この後に近親婚による人類のはじまりが語られていたことはほぼ間違いない。

いよいよ最後の段落であるが、谷野氏はこれを『風俗通』（後漢時代）にみえる次のような説話と比較している。

この世界のはじめ、人類は存在しなかった。そこで女媧は黄泥をこねて人類を作ることにした。しかしこの仕事はあまりにも大変だったので、彼女は縄に泥をつけてそれを振った。すると縄から飛

び散った泥の一滴一滴がすべて人間に姿を変えた。泥をこねて作られた人間が金持ち、縄から飛び散ってできた人間が貧乏人になった。

氏によると三段階のつぎはぎの中で最も無理が目立つのは、第二段落から第三段落への移行である。なぜなら第二段落ですでに人類の誕生をうたっている以上、第三段落であらためてそれを繰り返す必然性は存在しないからである。

こうした点を確認したうえで、谷野氏は最後の段落のモチーフについて、これが河南省各地の寺廟で行なわれている次のような求子祈願の儀礼に対応することを指摘している。

女媧廟に子授けを祈願した女性は、いくばくかの賽銭を投じたあと、廟に並べられている泥人形を取ってそれを赤い糸でしばり、こっそりと家に持ちかえってベッドの下に隠しておく。運良く子供が生まれたら、それを女媧の授け子といった。

「中原神話考」の大まかな枠組は以上の紹介でつきている。そこで次には谷野氏の分析を土台にして、そこに私なりの見解を付け加えてみたいが、その前に、そもそも口承文芸の本質はどこにあるのかという点に言及した、ブルンヴァンの次のような発言に対し、読者の注意を喚起しておこう。

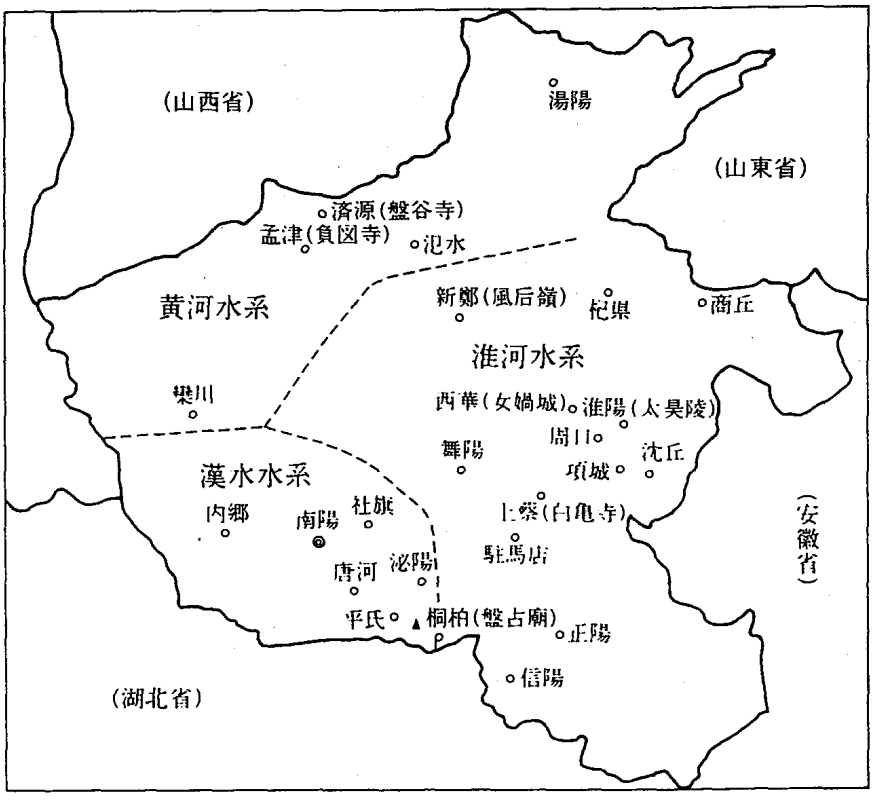
「フォークロアのあらゆるアイテムは、安定した中核を保つ一方で、それらが伝えられてゆくにつれて、その長さやディテール、スタイル、上演の技術などについてそれぞれ異なる無数の「ヴァリアント」を作りだすために、常に変化しているということだ。簡単に言えば、フォークロアとはさまざまなヴァリアントという形での口述の伝承から組み立てられるものなのだ」(4)。

ブルンヴァンはここで、「フォークロア」という言葉を口承文芸を総称する表現として使用しているが、それによると人々が口伝えに語る伝承の本質は、たとえそれが同一のモチーフに属するものであったとしても、様々の分岐を生み出す「多様性」を有しているという一点に集約されることになる。

ところがこうした定義にあらがうがごとく、『選題資料』に収録された人類起源神話の特殊性は際立っている。なぜならば本書の中で実に一七二ページもの紙数をさいて収録された膨大な人類起源神話をいくら精読してみても、上述したような①②③という展開から逸脱した話型を見いだすことはほとんどできないからである。つまり、

こと人類起源神話に関するかぎり、河南省では画一的な話種が広範にわたって分布しているわけであり、こうした事態を説明するためには、この話しを意図的に散布した特定の職能集団の活動を想定する必要があると思われる。さらに「中原神話考」が明らかにしたように、人類起源神話の各モチーフはすべて過去の文献にその起源が遡及できるものばかりである。このことは神話を語ったのがたとえ「文盲の老農民」であったとしても、伝承の出所は別に求める必要のあることを強力に示唆している。つまり私の考えでは、「民衆の発見」は必ずしも「民衆の創造した伝承の発見」に直結しないことになる。

そこで谷野論文から引用した地図と表を御覧いただきたい。地図の方は河南省について、そこを流れる河川を基準にしながら、省内をさらに三つの地域に下位区分したものである。表は各々の地域で伝承される神話の主人公を示したものだが、これを一見して明らかなように、それぞれの水系と神話の主人公の名前のあいだには明確な対応関係が認められる。つまり漢水水系では盤古兄妹を主人公とする伝承が一九例も採集されているにもかかわらず、伏羲・女媧を主人公とする伝承は皆無である。これに対し、淮河水水系に目を転じると、盤古兄妹を主



地図　河南省における洪水神話の伝承地

表　盤古、伏羲、女媧神話の分布

	伝承地	盤古	伏羲	女媧	伏羲・女媧	その他の兄妹	廟宇、陵
黄河水系	済源	2		3			盤谷寺
	孟津		2				負図寺
	密県					1	
	湯陽					1	
	欒川	1					
漢水水系	泌陽	4					
	桐柏	12				1	盤古廟
	唐河	1					
	平氏	1					
	南陽					1	
	社旗	1					
	内郷					1	
淮河水水系	商丘、開封					1	
	杞県			1			
	新鄭			1			風后陵
	西華			5		3	女媧城
	淮陽		2		5		太昊陵
	項域				1	3	
	沈丘				2	6	
	舞陽					1	白亀寺
	上蔡				1		
	駐馬店					1	
	正陽					1	
	信陽			1			
	伝承地不明	1	1	1	1	1	

人公とする伝承は皆無となり、それに代わって伏羲・女媧を主人公とする伝承が実に一九例も収録されている。そしてこうした事実と見事に対応する形で、漢水水系には盤古廟が存在し、淮河水水系には女媧城、太昊陵（太昊は伏羲の別名）といった宗教施設が確認される。

つまり「中原神話」の説話の散布者からみた興味の中心は「泥による人類の創造」という最後の一点にあり、ことさら彼らがこの場面に説きおよばなければならなかった理由は何よりも、人類の誕生を反復する形で繰り返される、自己の寺廟における求子儀礼の霊験があらたかであることを声高に喧伝する意図以外の何者でもなかったと考えられる。

もしも私の推定が正しいとするならば、神話の分布範囲から、逆に各寺廟の勢力範囲をある程度推定できることにもなり、また、宗教説話が流布してゆくさいの「水系」の重要性は、中国を河川の分布によっていくつかの地域に下位区分する人類学者の見識に抵触しない。

言うまでもなく、私は河南省における人類起源神話の

性格づけを、一つのケース・スタディとして提示したにすぎず、今も中国で続々と発掘されている漢民族の「生きている神話」がおしなべて、道士などの宗教的職能者の手によって語りだされたものとは考えていない。それらはすべて、個々の事例ごとに分析がなされるべきものであろう。今は「中原神話」の性格の一端について私見を述べるにとどめ、ひとまず擱筆したいと思う。(5)

注

(1) この間の事情については、伊藤清司『中国の神話伝説』(東方書店、一九九六年)の「はじめに」の項に簡潔な説明がなされている。

(2) 神話を対象としたものではなく、また緯書のみを分析したものでもないが、儒教と「怪力乱神」的思考との意外に親密な関係を、孔子にまつわる伝承にしぼって追及した最近の労作に、浅野裕一『孔子神話』(岩波書店、一九九七年)がある。

(3) 「女媧・伏羲神話系統考」(『東方学』五九輯、一九八〇年)

(4) 大月・菅谷・重信訳『消えるヒッチハイカー』(新宿書房、一九八八年)

(5) 本小論を下書き原稿の段階で読んでいただいた金文京氏から、人類起源伝承の各段落のモチーフは漢代や六朝時代にまでさかのぼれるにせよ、道士達が直接に依拠したリテラリーソースは、廟で用いられる科儀書や語りもののたぐいであろうという御指摘を受けた。この点を確認するためには実地調査を行なう以外に方法はなく、また仮にフィールドワークを実施しても、文革時期における宗教施設の徹底的な破壊を考慮にいれると、果たして関係する資料が残っているかどうか疑問であるが、極めて有益な御教示をいただいたことに対し、謝意を表したい。